

〔研究ノート〕

司馬江漢による春重署名の肉筆画

筆者は、『大和文華』126号(2014年1月)において、「司馬江漢の錦絵」という論文を発表し、江漢の中判錦絵について論じた。その趣旨は、江漢が春信存命中に春重署名で錦絵を発表するとともに、春信署名でも錦絵を発表したこと、春信の跡を継いで二代春信となった(春信存命中にも春信名で作品を発表していたと考えている)ことを作品の分析から証することにあった。その考察は、中判を中心とした錦絵に限定したが、浮世絵師時代の江漢の研究には、中判以外の版画、枕絵本を含む版本と、「春重」署名の肉筆画の考察を欠かすわけにはいかない。

版画・版本の研究は、(初代)春信との峻別と様式的差異が中心になるが、「春重」署名の肉筆画の研究は、それに、制作時期と、「春信」ではなく「春重」と署名した理由も考察する必要がある。加えて、今は問題となっていないが、「春信」署名の肉筆画のなかに江漢の作品がないかどうか検討されるべきであろう。

成瀬不二雄氏は、江漢は、安永元年(明和9年、1772)には宋紫石門に入って「江漢」号を使用していることを明らかにされたが、安永期の「春重」名の肉筆美人画の多くには「春信」印が捺されている。江漢が、二代春信として周囲に認められ、おそらく「春信」印も正当に入手したとすれば何の問題もないが、春重から二代春信と改名したとすれば、その後は春信名で浮世絵の制作を続けるのが普通であり、江漢も明和7年から1年くらいは「春重」名を使わなかったと思われる。おそらく、自意識の強い江漢は、その後、初代春信の後塵を拝することに耐えられず、浮世絵の制作に際しては「春重」名を使うことにしたのではないだろうか。安永期には、まだ、「江漢」名で肉筆浮世絵を制作することを世間が許容する環境にはなかったので、やむなく「春重」名も併用したと考えている。

ともあれ、現時点で確認した春重署名の肉筆画((12),(13)は焼

失したもの)は以下のとおりである。これらのうち、パワーズ・コレクションの2点と(10)以下の作品は実見していないことをお断りしておきたい。

- (1)美人納涼図 絹本着色 86.0×32.4cm 神戸市立博物館蔵 署名「蕭亭藤原春重寫」、印章「春信」(白文方印)
- (2)夏月図 絹本着色 93.5×32.6cm フリーア美術館蔵 署名「蕭亭春重画」、印章「春信」(白文方印)
- (3)冬月図 絹本着色 88.1×35.0cm ボストン美術館蔵 署名「蕭亭春重画」、印章「春信」(白文方印)
- (4)縁先美人図 紙本着色 82.0×27.0cm パワーズ・コレクション 署名「蕭亭春重画」、印章「春信」(白文方印)
- (5)シャボン玉を吹く美人図 絹本着色 94.7×35.6cm パワーズ・コレクション 署名「蕭亭春重画」、印章「春信」(白文方印)
- (6)やつし莊子胡蝶の夢 絹本着色 42.3×60.6cm

図1



図2



図3



- 個人蔵 署名「蕭亭春重」
- (7)引手茶屋前花魁道中 絹本着色 91.0×37.3cm 太田記念美術館蔵 署名「蕭亭春重画」、印章「春信」(白文方印) 禿二人は遊女の後ろ
- (8)引手茶屋前花魁道中 絹本着色 99.0×38.2cm 太田記念美術館蔵 署名「蕭亭春重画」、印章「春信」(白文方印) 禿二人は遊女の前
- (9)縁先美人図 紙本着色 82.8×24.1cm 大和文華館蔵 署名「蕭亭藤原春重寫」、印章「春信」(白文方印)
- (10)縁先美人図 紙本着色 84.7×27.4cm サンフランシスコ・アジア美術館蔵 署名「鈴木春重画」、印章「春信」(白文方印) 讃あり
- (11)夏庭美人・冬暁美人図 絹本着色二幅 各、三尺×九寸三分 桑原羊次郎旧蔵(『松陽庵・桑原家愛蔵品展観入札』目録、昭和八年十一月、に掲載) 署名「蕭亭画」、二印あり
- (12)鈴木春信筆「美人三番叟図」一幅 小林文七旧蔵震災焼失品(『浮世絵界』2-1、昭和十二年一月、に高木彌久氏が記述、図なし)という「蕭亭春信」款ス「賛ニ曰ク 中々も驚娘も及びござるまい此附殿の色の白さは」とある

- (13)鈴木春信筆「七福神見立子供遊図」 絹本一卷 小林文七旧蔵震災焼失品(『浮世絵界』2-1、昭和十二年一月、に高木彌久氏が記述、図なし)という「七段 奥一段掛物中ノ図ハ春重筆」とある
- これらの作品の分析は他日を期すしかないが、一見して判明するのは、同様の構図のものが多く、特に、縁先美人図が多いという点である。江漢が自身と浮世絵の関係について書いた『春波楼筆記』の記事の後段には、次のように記されている。

夏月の図は薄物の衣の裸体の透き通りたるを、唐画の法を以て画く。冬月の図は、茅屋に簷繞り、庭に石灯籠など、皆雪にうづもれしは、淡墨を以て唐画の雪の如く隈どりして、……

この一節に表わされている作品は、現在、(2)夏月図(図1)と(3)冬月図(図2)であろうとされるが、(11)夏庭美人・冬暁美人図(図3)も、それに該当する。近々その作品を拝見できることになったが、その報告も他日を期したい。(浅野秀剛)

※図1は『浮世絵聚花 フリーア美術館』(小学館、1981年)、図2は『ボストン美術館 肉筆浮世絵Ⅱ』(講談社、2000年)、図3は『松陽庵・桑原家愛蔵品展観入札』目録より複写しました。